

DECADE TO OVERCOME VIOLENCE 2001 - 2010

すべての暴力を克服する10年 祈りつつ行動するための手引き

日本キリスト教協議会（NCC）

参加への招き

「平和は願い求めるものではなく、つくるものであり、行うものであり、人のあり方に関するものであり、分けあたえるものなのです」
(マザー・テレサ)

この引用文は、平和をもたらす、つくり出す者となる課題を私たちに投げかけています。それはまた、平和が私たちの内にあることも思い起こさせてくれます。けれども、平和を実現するためには、私たちは共に働く必要がありますし、それこそが、世界教会協議会(WCC)が呼びかけた「すべての暴力を克服する10年(2001年~2010年)=DOV」であり、私たちに今日始めるように投げかけられている課題なのです。

共に働くことによって、私たちは、さまざまな暴力の相互関係性が地域や地球規模であらわれる中で、それをもっと明確に理解し、また私たちが知らず知らずのうちにいろいろな形で暴力を助長していることに気づくことになるでしょう。地球規模のエキューメニカルな家族の助けがあれば、私たちは平和構築の新たなモデルと実験を開始することができるのです。

暴力はあらゆるところで支配的です。多面的なことから、各教会はこの「10年」に参加する独自の方法を見つけなければなりません。それが地域レベルであれ、全国レベルであれ、あるいは国際レベルであってもです。

DOVに関して最も多い質問の一つは、「暴力の連鎖をどうやって断ち切るのですか?」というものです。この学習の手引きは、その質問に部分的に答えています。「無知の連鎖を断ち切るのと同じです。つまり、人々を教育することです。」

WCC(世界教会協議会 World Council of Churches)とは、現代のエキューメニカル運動を中心的に担ってきた国際関係期間(本部はスイスのジュネーブ)120カ国以上、正教会、聖公会、プロテスタント諸教派の342教会から構成されています(2002年現在)。WCCは、世界の諸教会の上位に立つ超越的な教会ではなく、「主イエス・キリストを聖書に従って神であり、救い主であると告白し、それゆえ、父、御子、聖霊の一つなる神の栄光のために、共同の召命をともに実現することを求める諸教会の交わりです。」

なぜ DOV = 「すべての暴力を克服する 10 年」 なのですか？

20 世紀における驚くべき技術の進歩は、人々がお互いを尊敬しあう上での進歩にもつながったのではないかと、私たちは思ってきたかもしれません。しかしその一方で民族や経済、環境、ジェンダーにからむ暴力がはびこりつつけているのを目の当たりにするのは、何とも悲しいものです。

もし私たちが歴史の中で立ち止まって過去 1 世紀を振り返る時があるとすれば、それは今に他なりません。

DOV は、ジンバブエのハラレで行われた世界教会協議会 (WCC) の第 8 回総会で 1998 年に発案されたものです。これは未来の世代のための平和を求める呼びかけに答えるものです。それは、過去 1 世紀を振り返るといふ課題を投げかけるものでもあります。

2001 年 2 月 4 日にベルリンで行われた WCC 中央委員会が DOV の開始のために発表したメッセージには、次のような新しい世紀のための希望が述べられています。

「私たちはこの地球上の四方から集まり、私たちの生活や地域、世界そして創造の秩序全体にはびこる暴力を克服することが緊急に必要であると認識しています。私たちはこの 10 年を開始することによって、私たちがもつ心からの願いに応え、正義に根ざした永続的な平和を築くのです」

しかし、この「10 年」は、決められたプログラムによって企画されているものではなく、むしろすべてのキリスト教会や団体が、自らの賜物をささげることによって平和をつくり、各自固有の召命感にしたがって、お互いに学びあひとも行動するための招きなのです。それは個人の行いを変えるというだけの問題ではありません。それは個人の暴力の陰に潜む根本的な原因を探ることであり、また暴力につながる組織的な不平等をまず克服することなのです。

最も大切なのは、和解と正義を求める神の招きについて、教会や個人が自らの聖書の理解を検証しなおす時が来ているということです。

なぜ暴力が生み出されるのかを理解することによって、私たちは、自らの中にある、そして世界にある暴力を減らし、理解と和解、そして赦しを生み出し育むために何をすべきなのか、そして何をすべきでないのかを知ることになるでしょう。

暴力の根源となる 4 つのテーマ

DOV をめぐる考察や行動をうながそうと、WCC は 4 つの主なテーマを暴力の根源として決めました。これらは 2000 年から 2001 年にかけて行われた教会の調査に対する反応から定めたものです。

これら 4 つのテーマとは、

- ❑ 暴力の精神と論理
- ❑ 権力の行使・乱用と誤用
- ❑ 正義の諸問題
- ❑ 宗教的アイデンティティと多元性です。

これらの主題は単に学問的な研究のためだけではなく、教会が暴力を克服するという課題に対する意識を高めることができるような眼鏡として、またそれによって教会が持続可能な解決策を見つけるのを助けるためにも設定されたものなのです。

しかし、はっきりしているのは、これら 4 つの現象がもつ特色や動き、そして相互作用が、各教会がもつ独自の文脈によって異なるであろうということです。したがって、このテーマは、各教会が持つ特定の環境においてさらに探求する必要があるのです。

暴力は避けられないのですか？

沖縄・辺野古での経験

沖縄県名護市辺野古（へのこ）の海上に、新しい軍事基地が建設されようとしています。ボーリング調査（実質、基地建設着工）を防衛施設局は4月19日から行おうとしていました。「命を守る会」が8年にもわたり、ヘリ基地建設反対の声を挙げ続け、1997年12月21日の名護市民投票で反対が52.85%と過半数を超え、「基地建設NO」の民意が勝利をしたにもかかわらず、です。

4月19日から、辺野古では「命を守る会」が中心となって、環境と生活、平和を破壊するボーリング調査（基地建設着工）を阻止するために座り込みが行われ、その結果、今日に至るまで、基地建設を阻止し続けています。現在も辺野古はとても緊迫した状況が続いています。明日が正念場、そう思う毎日です。

沖縄の辺野古（へのこ）に行き、ともに座り込みをされたTさんが次のように経験を分かち合ってくださいました。「暴力は避けられないのか？」と問いつつ、証言に心を傾けてみましょう。

●-----●
- 9月8日の防衛施設局の新聞発表
基地建設のためのボーリング調査を明日行います。場所は辺野古漁港、もしくはキャンプシュワブ。」-

その日辺野古では朝から緊迫した空気が流れていました。今日は那覇防衛施設局が動く。4月のときのような奇襲に備えて本部のほかは何人かがそのままのテントに前日から寝泊りをしました。集合時間の7時には大分人が集まってきました。いつものようにミーティングを行い、この座り込みの約束事項の確認を行います。非暴力の運動であること、戦争という暴力に暴力で対抗してはそれ自体が負けであること守れない人は此処から立ち去って欲しいというものでした。

次々と人は増え、辺野古漁港まえに400人、キャンプシュワブまえに100人ほど集まった11時頃、防衛施設局が馬天港という南部の港から2時間の余を掛けて辺野古沖に向かっていているということがNHKニュースで流れました。NHK以外のメディアはニュースが流れてからそれを知ったようです。真正面から向かってこない卑怯なやり口でした。

朝から激しく降ったり、照ったりという中で、機動隊がやってきたらテントから出て道路に坐り込んでスクラムを組み完全非暴力で阻止しようとしていた人たちは目の前から逃げて海から回った施設局の嫌らしいやり方に憤慨。しかし怒ってる間もなく、一年前から毎週練習していたカヌー隊7艘と抗議のための舟2隻が出港しました。カヌーには20代男性から70代女性まで乗ってます。抗議船にはいざというときに海に飛び込んで阻止する「飛び込み隊（別名ぶかぶか隊）」が10人ほど乗り込みました。

それと同じ頃、汀間（ティーマ）漁港・・・辺野古の浜の北へ20分ほどのところから防衛施設局の広報課がメディアを漁船に乗せて調査区域に連れて行くという情報が入りました。マスコミには報道の自由があるから取材しないでくれとはいえないが、施設局の人間が説明のために一緒に乗り込むのはやめさせようと阻止行動に50名が出かけました。汀間では施設局課長をみんなで説得し、舟に乗り込まないと確約させ、メディアを乗せてから話し合いに応ずるというので待っていました。しかし舟の出航後、彼らが帰ろうとしたため大阪の牧師さんが車の前に立ちをはだかりました。港の砂利の上で皆で車座になり施設局の4人と話し合いを持ちました。地元の方言を交えて「君の家族に恥ずかしくないのか」と言われた同じうちなんちゅの課長は一瞬言葉が詰ったようです。3時半まで雨が降ったり照り付けたりのその場所で話し合いを続け

ました。沖縄にはこうして丸くなって話し合いを持つということがよく行われていたようです。

4時にテントに戻り報告会。カヌー隊の危険を冒しても阻止しようとした行動に対してみなの手拍しかしボートや船に乗った人たちは悔しさを訴えました。施設局はわたしたちの抗議をかわすために、何艘もダミー船を出していた。実際に調査に必要なダイバーは海に潜らなかつたし、かろうじてブイを一つ二つ浮かべただけだったが、それでも「調査が着工できた」と報道するのだろう。沖縄を馬鹿にした行動である。何故堂々とこないのだというのが全員の感想でした。必死に追いかけて旗を立てて頑張ったのに阻止できず、ダミーもいてとても悔しかったと目を赤くしていた飛び込み隊の女性。闘う相手が分かっていたら正面からぶつかれるのに、それができない、と怒りを訴えたカヌーの70歳の女性。カヌー隊・抗議船リーダーの沖縄の牧師さんはおじい、おばあちが8年間守り続けてくれたのに阻止できなかった、ごめんなさいと泣いて挨拶していました。

船が2隻ではどうにもならない。船を持っている人は貸して欲しいと訴えていました。また船舶の免許やカヌーを操れる人の応援を待っています舟をもっとチャーターしなければならぬのでカンパも必要とのことでした。

翌日、辺野古から配信されるニュースを見ました。防衛施設局が辺野古から出港できなかったのは、私たちががんばったから。防衛施設局がほとんど作業ができなかったのは、私たちががんばったから。私たちは勝っている。」

今回辺野古に行って、あまりにも腹が立ち、また悔しく、悲しかったので、わたしは大事なことを忘れかけていました。「闘いに勝てる方法が一つだけある。それは、勝つまで続けること。」「戦争には勝者はいないと言われるが、命を守る闘いに敗者はいない。」「基地建設が白紙撤回されるとき、勝者になるのは私

たちだけでなく、基地を作ろうとした人たちも一緒に勝者になれる。命を守ることができた、と。」前回5月に辺野古に行ったとき感じたことでした。みんながそう確信している。だからここで座り込んでいる人たちは、張りつめて緊張していながらこんなに明るく、輝いているのだ。

ある牧師さんが言っていました。「キリストがいるなら、今、辺野古にいるに違いない」と。「これらのことを話したのはあなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」ヨハネによる福音書16章33節

命を守るための闘い、平和をつくりだす闘いを勝つまで続けていきます。辺野古のホームページは毎日更新されて現地の様子を伝えていきます。東京の国会前では毎日座り込みが行われています。

私たちは力をどのように使えばよいのでしょうか？

青年が暴力連鎖の渦に巻き込まれないように、主イエスの名において育ててください。

今、アジア太平洋地域のキリスト者青年の一人ひとりの願いと祈りは、この言葉に込められています。それは、キリスト者青年のエンパワメントです。青年の豊かな感性を活かしながら、地域社会において多民族・多文化共生社会をつくる場に青年を立たせることです。

現代を生きる青年は、この世界を取り巻くさまざまな問題に気づきつつあります。

アフガニスタンから来た青年との出会い

Aさんというアフガニスタンの青年が、紛争国から難民としての庇護を求め、日本に必死でやってきました。もう2年以上も前のことです。彼は入国と同時に、東日本入国管理センターに収容されました。彼の家族や親戚はアフガニスタンで、タリバンの反政府行動に関わっていたという理由で、政府によって連衡されています。彼はいのちの危機からのがれるために、日本に庇護を求めて逃れてきたのです。収容所の中で、人と交わる自由、自分の国が背負う紛争の悲惨さを訴える自由を奪われているAさん。Aさんは、毎日祈り続けました。

ようやく裁判の法廷に立つ自由が与えられたAさんが心から叫んだ言葉はこうだったと思います。「アフガニスタンで日々生きる権利を与えてほしい」「軍事的暴力でいきなり家族のつながりがつぶされることの恐怖と悲しみがいかに犯罪的であるか」「毎日の食事を家族そろって安心して食べられる自由がほしい」「なぜ同じ人間ばかりに暴力が集中するのか」。Aさんが法廷という公の場で訴えたこの叫びは、Aさんの現実を知った日本のある青

年の心を動かしました。

Aさんの叫びを聴いた青年は、Aさんと少しでもつながって生きようと思いました。Aさんを取り巻く状況を知り、アフガニスタンの問題と、今自分たちの国や社会の状況が深く繋がっていることに気づきました。自分が生きている日本という国がふるう軍事的、政治的、経済的暴力が連鎖して、Aさんやその家族、親戚を苦しめているのだと、敏感に感じ取りました。

NCC青年委員会は、暴力を断ち切り、いのちの連鎖を生み出すために動き始めています。神が一人ひとりを生かすために与えたいのちをいとおしみ、暴力的に破壊することに「否！」の態度を示したいと思います。青年委員会は、正義と平和のために、もっとも弱く小さくされた一人の青年、アフガニスタンのAさんの声を聴く感性を、青年たちに磨いてほしいと願っているのです。

毎年、10月第3週はアジア学生青年週間と位置づけられています。平和と和解の実現にむけて、ともに歩む青年のつながりをつくるために開かれているワークショップです。Aさんと出会いを体験したある日本の青年が、このワークショップに参加し、次のような詩を参加者と分ち合いました。ご紹介します。

平和へと向かう「力」

私たちは他の人間たちに、動物たちに、そして地球に対して「力」(支配力)を行使している現実に気づこう。

私たちは、自分たちの心の中に葛藤や対立を抱えていることに気づこう。私たちは、しばしば自己中心的になりがちだということに気づこう。

しかし、私たちは既存のものに代わる。解決方法を見つける「力」(想像力)をもっている。私たちは自分たちの心の中に平和を実現する「力」(潜在的能力)も備えている。私たちは他人と協力して平和を実現する「力」(協同力)をもっている。

私たちがもつ多様性や違いを楽しもう。自己との対話、他の人々やグループとの対話を楽しもう。そして平和へ向かうプロセスを楽しもう。
(作：葉名利栄子)

ワークショップに参加した青年は、平和を実現することを主イエスの名によって祈り求めています。青年委員会は、日本社会が過去の歴史において犯してきた暴力の根源を知るために、国境を越えたさまざまな交流プログラムへ青年を派遣しています。そこへの参加が、青年にとっては、平和をつくり出す大きなエンパワメントになっているのです。

過去の歴史において、日本政府が、国境越えて他国を侵略し、そこに生きる人々に、軍事的暴力をふるいました。今、日本の青年は、その過ちを自分自身の罪として悔い改め、

あたらしい関係をつくり出すために、和解の作業を行おうとしています。その作業で大切なことは、そこで起こった歴史的事実を、自分の心と体にしっかり記憶するということです。和解の作業は、けっして容易なことではありません。しかし、歴史的事実を自分の心と体に記憶することこそ、平和の道へと繋がることを青年たちは感じています。平和を創造する力の源となっているのです。

「ああ、わが主なる神よ、わたしは語る言葉を知りません。わたしは若者にすぎませんから。」しかし主は言われた。「若者に過ぎないと言ってはならない。わたしがあなたをだれのもとに遣わそうとも、行って私が命じることをすべて語れ。」

(エレミヤ書1章7節)

話し合ってみましょう

暴力ではなく、いのちの連鎖をつくり出す体験をわかちあってみましょう。

力とは何でしょうか？

あなたが大切にしたい力を、どのように使えばよいでしょうか？

正義に適った行動とは？

「それは不公平だ」とか「それは正しくない」と言ったことがあるでしょう。そのとき、どうしてそう考えましたか？今、どんなニュースが話題になっていますか？正義に反すると感じることはありませんか？

正義とは？

正義というと裁判所を思い浮かべるかもしれません。裁判所で正義が行われることはもちろん大切ですが、正義とはそれ以上のことです。正義は道徳、倫理に関わることで、単に法的なことではありません。それは正しい関係を取り戻すための、正しい行動にかかわることです。

聖書には異なる2つの神のイメージが見いだされます。一つは私たちに説明責任を求め、審判を下す神。もう一つは人々に行動を促して正義を実現する神です。正義と憐れみは切り離せません。罪人を罰することだけでなく、新たな関係を築くことが求められているのです。

旧約聖書に士師記(さばきつかさ達の記録)という書があります。神が召したさばきつかさは強い者、人望のある者でなく、むしろ小さな弱い男女でした。かれらは信仰によって働きをなしました。いつの時代にも神は人々を正義のために働くよう招いています。

不正義は暴力の一つです。不正義は、政治的、民族的、人種的な暴力を増幅します。正義のためにという大義を掲げて残虐、非道なことを行っている国家指導者、政治家たちがいますが、正しい関係が正義に反する手段によって築かれることは決してありません。

正義と平和はどんな関係にあるでしょう。武力紛争が終わると「平和」になったと言われます。しかし、全ての人が平和を実感する

には、もう一つの暴力である諸々の不正義が解決され、和解が実現することが必要です。

不正義は様々な形をとりますが、ここでは4つの不正義について考えてみましょう。どのようにして不正義を正しい関係へと変革していけるでしょう。どのように正義を行えばよいのでしょうか。

経済的な不正義

富の極端な集中が、国際的にも、個々の国においても見られます。今、世界で全ての人々が十分に食べられるだけの食糧が生産されているにも関わらず、多くの人々が最低限の栄養さえとれない貧困に苦しんでいます。「南」の国々で、バナナ、エビ、コーヒーなど、輸出する作物の生産者の多くが、社会保障もなく、食べるにも困るような安い賃金しか得ていません。消費している私たちはどんな生活をしているのでしょうか。

政治的・社会的な不正義

国連決議に反したという疑いを証拠もなしにかけられただけで武力で国家を転覆され、十万人を超える民間人が殺される国がある一方で、何十年にもわたって多くの国連決議に違反しながら全く何の制裁も受けず、逆に世界の強国から軍事的、経済的支援を享受し続けている国があります。

基本的人権を否定し、難民申請している人々を犯罪人として収容し、女性、性的少数日本ではどうでしょう。今なお「部落」差別の横行を許し、国籍登録がない子ども達の者への差別が許されています。一方で政治的、社会的権利を享受している人々の間ではシステムへの関心、信頼が長年にわたって低下し続け、政治的、社会的な参加がとて小さくなっています。

文化的な不正義

宗教的、文化的アイデンティティに対する帝国主義、植民地主義の脅威は依然として続いています。個々人が自分らしく在ることができ、土地と共同体に根ざしているような文化の破壊が進み、世界中で均一な商業志向の文化が取って代わりつつあります。個人主義的な自己実現と経済的な成功を志向し、暴力を美化するような生き方が推奨されているのです。

人種に関する不正義

人種主義は身体的特徴や人種的な型にはめた見方で人々を非人間化します。有色人種は長年にわたって劣っているものとして扱われ、抑圧者たちによって暴力的な屈辱にさらされてきました。人種主義が可能にした奴隷貿易や植民地支配が遺したものは今なお桎梏となっています。

聖書研究

十 アモス書8章4～7節 「聞け、貧しい者たちを踏みつけ、地の悩む者たちを絶やす者よ。…主はヤコブの誇りにかけて誓われる。“わたしは、かれらのしていることをみな、いつまでも忘れない。…”」

私たちは、どのような経済のシステムの中で、どんなビジネスの慣行に従っているでしょう。正義と、神を礼拝することの関係を考えましょう。

十 ルカによる福音書4章17～21節 「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから、主は私を遣わされた。捕らわれ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために、虐げられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。」

イエスはこのイザヤ書の言葉を、荒れ野での誘惑の後、ナザレの会堂で、彼の宣教奉仕の基礎として述べられました。イエスは自己目的化した宣教活動、言葉だけの奉仕を否定したのです。非難し、罰することを求めるのではなく、正すこと、回復すること、そのような正義を肯定されたのでした。

あなたの教会はこのような働きをしていると、第三者は見るでしょうか。

これらの2つの聖書箇所は、どのように正義を行うべきかについて、何を語っているでしょうか？

どんなアイデンティティを？

「アイデンティティ」という言葉は、自分が自分であることという意味でよく使われてきました。特に人権活動の分野においては、1980年代半ばに在日外国人登録証の大量切り替えが行われ、それを機に在日韓国・朝鮮人の中から指紋捺拒否裁判をおこす者があらわれた時からよく使われてきました。一人の人間が、日本人と朝鮮人という2つの心と体に引き裂かれてきた苦痛、恨み、怒りを公の場で語り始めたときに、使われ始めた言葉です。

在日韓国・朝鮮人の現実を歴史的に辿ってみましょう。彼ら／彼女らは、強制連行で自分たちの生活の場から、心と体を切り離されました。日本においては、二つの名前、二つの言葉にいつも自分を切り裂かれてきました。母語、名前、民族的生活習慣を奪われ、いつも「犯罪予備者」として政府に管理されてきたのです。今でこそなくなりましたが、5年毎に強要されてきた指紋押捺と外国人登録証切り替えの現実、彼ら／彼女らにとっては、一つの肉体と心を引き裂く行為、極めて大きな人格破壊だったのです。自分が自分でありたいという生き方を、政府が法律によって完全に打ち砕こうとした暴力行為でした。

神は、彼ら／彼女らに「出エジプト」を示されました。それは指紋押捺を拒否すること、また外国人登録証による管理を拒否することを通して、管理する日本社会から解放され、彼ら／彼女らが本来の自分＝アイデンティティを取り戻すことでした。多くの在日韓国・朝鮮人がその行為につながっていきました。現在、その彼ら／彼女らの子どもたちが、日本で新たに生まれ、日本語を母語とし、日本と韓国をつなぐかけ橋として生きる新たな道を求め始めています。子どもたちは、在日1世・2世である祖父母や親の姿を通して学ん

できたことを基に、一つの肉体と心が、けっして引き裂かれてはならないことを信仰の証として、非暴力の生き方として歩んでいこうとしています。

在日韓国・朝鮮人の青年たちが集まり、よくはなしてきたのは「私たちはみんな同じではない」という言葉でした。これは日本人同化への抵抗の叫びです。この抵抗の叫びは、在日韓国・朝鮮人たちが求める「出エジプト」そのものです。

日本人は、2001年から住民基本台帳ネットワークシステムと称して11桁の番号で管理されています。在日韓国・朝鮮人たちが管理されてきたと同様に、日本人たちも政府の管理下におかれています。日本人もまた、自分たちのアイデンティティを求めています。

「出エジプト」を実現するために、立場をこえたさまざまな人々が、共に歩みだす時が来ているのではないのでしょうか。

神はその嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。神はイスラエルの人々を顧み、御心に留められた。

出エジプト記2：24～25

話し合ってみましょう

あなたにとってアイデンティティとは何でしょうか？

現代の在日韓国・朝鮮人、日本の青年にとって「出エジプト」とは何でしょうか？

私たちに何ができるでしょうか？

この学習の手引きで取り上げたさまざまな証言に心を傾けることは、皆さんの長い旅の第一歩となります。皆さんが話し合ったすべてのことを通じて、いくつかの洞察やさらなる疑問、もごとの現状に満足しないという決意、そしてキリスト教の信仰には計り知れないほどの力の源があるという認識が与えられたのであれば幸いです。私たちは、自らの働きを通じて、私たち自身や、私たちの教会、そして社会を変えることができるでしょうか？

焦点を絞り、より深く掘り下げて見ましょう

私たちの行動が効果的なものとなるようにするためには、焦点を絞る必要があります。重要だと思った特定の問題を1つか2つ定めるよう努めましょう。これらは地域の問題かもしれないし、地球規模の大きな問題かもしれない。例えば、ある教会は地元のある暴力の問題をとりあげました。他には、経済的に最も貧しい国々の国際債務を帳消しする運動に参加したところもあります。皆さんの教会が、またあなた自身が何を選ぶにせよ、必要なのは問題をより深く掘り下げて見るとともに、その根底にある問題についてよく考え、他の地域にいる人たちの対応のしかたから学ぶことです。

自分が何をしたいのか知ること

私たちが望むのは、暴力を克服することです。例えば、子どもたちの虐待をやめるようにとか、民族紛争を終結させるように人々に訴えたりするだけでは、十分ではありません。暴力はほとんどの場合、その根底にある問題に対処するための一つの方法なのです。私た

ちは、特定の問題に非暴力的な方法で対応するにはどうすればよいのか、そしてどうすれば正義を伴った解決策を生み出して暴力の原因を取り除き、あるいは減らすことができるのかを考え抜かなければなりません。暴力に対する積極的な代替策を提示し、両者の新しい関係に関与することが必要なのです。世界にはびこる暴力は私たちを圧倒し、それによって私たちはどうすることもできないと信じてしまうことになりかねません。どんなに小さなことでも、効果的に変革を起こすことができると思う何かを選ぶことによって、私たちは変革の過程を始めるのです。暴力を克服するためのすべてのことができなくても、心配する必要はありません。達成できることから始めましょう！

より多くの人たちに参加してもらおう

教会の中で、あなたは他のだれに参加してもらおうことができそうですか？ エネルギーや想像力をもった女性や青年のためのグループをもつ教会は、たくさんあります。和解について深く掘り下げることができる聖書研究会はありますか？ あなたの教会では、牧師による介護を通じて、暴力の被害者をどのように支えていますか？ 彼らが被害やそれを負わせた人たちについて話すことができる、安全な場所がありますか？ 自分のところだけではなく、地元にある他の教会や他の教派の人たちにも参加してもらおうことはできますか？ あなたの地域や国には、暴力の問題に関する既存の運動や団体、組織にどんなものがありますか？ どうすればそれらとつながることができるでしょうか？

祈り

もし私たちを変えることなしにものごとを変えてくださるよう神に期待する祈りであれば、それは危険です。私たちは暴力の連鎖の中で生き、問題の一部であり、単なる傍観者ではありません。祈る時には、私たちは個人や教会として、神に対して心を開きます。祈りという霊的な修練によって、私たちは個人や教会として、和解と平和をうながす生活をする事ができるのです。これには、他の人々との関係のつくり方を変えることが伴うでしょう。祈りは、暴力の被害者と連帯するための強力な手段なのです。

あなたの考えや計画を 知らせ、広めましょう

あなたが学んだことやこれから行おうとしていることを、他の人々にも知らせましょう。「すべての暴力を克服する10年」は、教会の発案によるものです。ですから、私たちは自らの展望や活動を分かち合うことで、お互いに励ましあう必要があるのです。あなたがこの「10年」にどのように参加しているのかを、あなたの教会や教団・団体に知らせましょう。NCC（日本キリスト教協議会）を通してエキュメニカルな動きにしてください。WCC（世界教会協議会）にも英語で連絡してみることも必要です。あなたの祈りと行動が世界を駆けめぐって暴力の克服の大きなエネルギーとなるでしょう。

「平和は、それを語るだけでは十分ではありません。それを信じなければならぬのです。でも、それを信じるだけでも十分ではありません。そのために働かなければならぬのです」

(エレノア・ルーズベルト)

祈り

飢えと戦争のただ中で、
私たちは豊かさや平和の約束を祈います。
抑圧と圧制のただ中で、
私たちは奉仕と自由の約束を祈います。
疑いと絶望のただ中で、
私たちは信仰と希望の約束を祈います。
恐れと裏切りのただ中で、
私たちは喜びと忠実さの約束を祈います。
憎しみと死のただ中で、
私たちは愛といのちの約束を祈います。
罪と衰退のただ中で、
私たちは救いと再生の約束を祈います。
どの側からも死に囲まれる中で、
私たちは生けるキリストの約束を祈います。

あなたの国の平和のために、
すべての地における暴力の被害者のために、
平和と正義のために闘う人々のために、
紛争状況の中にある教会のために、
戦争や暴力のない世界のために、
死からいのちへと、
偽りから真実へと、私をお導きください。
絶望から希望へと、
恐れから信頼へと、私をお導きください。
憎しみから愛へと、
戦争から平和へと、私をお導きください。
私たちという存在を、
私たちの世界を、
そして私たちの宇宙を、
平和で満たしてください。

アーメン。

==第1部 創世記==

第1部では、地球が生まれていった過程を聖書の創世記をもとに想像していきましょう。

1日目 光あれ はじめに神は天と地を創造された。地は形なく、むなく、闇が淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてを覆っていた。神は「光あれ」と言われた。すると光があった。神はその光を見て良しとされた。紙はその光と闇を分けられた。紙は光を昼と名づけ、闇を夜と名づけられた。夕となり、また朝となった。第1日である。

1つ目の口ウソクをともす

2日目 空からのメッセージ 神は言われた。「水の間には大空があって、水と水とをわけよ。そのようになった。神は大空をつくって、大空の知多の水と大空の上の水とを分けられた。神はその大空を天と名づけられた。夕となり、また朝となった。第2日である。

2つ目の口ウソクをともす

3日目 海と陸と植物 神はまた言われた。「天の下の水は1つ所に集まり、乾いた地が現れよ。そのようになった。神はその乾いた地を陸と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神はそれをみて良しとされた。神はまた言われた。「地は青草と種をもつ草と、果実をもつ草や木とを地上にはえさせよ。そのようになった。神はそれを見て良しとされた。夕となり、また朝となった。第3日である。

3つ目の口ウソクをともす

4日目 太陽と月と星の創造 神はまた言われた。「天の大空に光がって昼と夜を分け、印のため、季節のため、日のため、年のためとなり、天の大空にあって地を照らす光となれ。そのようになった。神は2つの大きな光をつくり、大きい光に昼をつかさどらせ、小さい光に夜をつかさどらせ、また星をつくられた。神は見て良しとされた。第4日である。

4つ目の口ウソクをともす

5日目 動物の創造 その1 神はまた言われた。「水は生き物の群れで満ち、鳥は地上、天の大空を飛べ。神は海のおおいなる獣、水に群がるすべての動く生き物とを種類にしたがって創造し、また翼のあるすべての鳥を種類にしたがって創造された。神は見て良しとされた。神はこれらを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。また鳥は地に増えよ。夕となり、また朝となった。第5日である。

5つ目の口ウソクをともす

6日目 動物の創造 その2 神はまた言われた。「地は生き物を種類にしたがって出だせ。家畜と這うものを地の獣とを種類にしたがって出だせ。」そのようになった。神は見て良しとされた。神はまた言われた。「われわれの形に型どって、人をつくり、これに生みの魚と空の鳥と、家畜と地のすべてのものを治めさせよう。」神は自分の形に人を創造された。すなわち自分の形に創造し、男と女とに創造された。「産めよ、増えよ、地に満ちよ。地をしたがわせよ。また海の魚と空の鳥土地に動くすべての生き物を治めよ。」

6つ目の口ウソクをともし、沈黙で祈る

==第2部 反創世記==

地は美しく、豊かであった。光は山や海に照り輝き、神の霊が宇宙を覆っていた。

人は言った。

天と地のすべての権力を、神の手から「わたし」が取り上げてやろう。「わたし」はその権力は良いものと思えた。「わたし」は権力を握る者、支配する者をほめたたえ、和解を求める人を呪った。そして「わたし」は権力を手中におさめた。これが世の終わりから数えて6日前のことであった。

口ウソクを1つ消す

人は言った。

民の中に分裂を起こしてやろう。「わたし」に味方する民と「わたし」に反対する民との間に、大きな分裂をもたらそう。そして良い民と悪い民との間に深い溝ができた。これが世の終わりから数えて5日前のことであった。

口ウソクを1つ消す

人は言った。

われわれが今までバラバラに持っていたすべての財産をひとつに集め、われわれの安全を確かなものとしよう。人の心をコントロールするマスコミと、人の魂を統率するメディアをつくり出そう。そして人々は自由を失い、不安になった。こうして世の中は二つに分裂し、戦いが起こった。「わたし」はこれを見て満足した。これが世の終わりから数えて4日前のことであった。

口ウソクを1つ消す

人は言った。

「わたし」が正しいのだ！と人々に思い込ませるために、思想の検閲をしてやろう。そして「わたし」は二つの検閲の機関をつくり出した。一つは「わたし」以外の人々がもっている「真実」を隠すこと。もう一つは「わたし」が正しいと思い込ませるための偽りの「事実」をつくり上げること。そしてそのようになった。「わたし」はそれを見て良しとし、当然のことだと思った。これが世の終わりから数えて3日前のことであった。

口ウソクを1つ消す

人は言った。

人類を破滅させるような武器をつくってやろう。遠くにいてもボタン一つで一瞬のうちに

全人類をころせるような強力な武器をつくろう。「わたし」は海底を走る原子力潜水艦と、空を飛ぶミサイルをつくり出した。「わたし」はそれを見て良しと思い、それを誇りとした。そして、それを祝福してこう言った。「地に増えよ、海に満ちよ、空を飛べ」。そうして戦いが起こり、憎しみと死がこの世に蔓延した。これが世の終わりから数えて2日前のことであった。

ロウソクを1つ消す

人は言った。

「わたし」に似せて神をつくろう。「わたし」が考えるように考え、「わたし」が行動するように行動し、「わたし」の望み通りに人々を殺す神をつくろう。そして「わたし」は、「わたし」に似せて神をつくった。そしてそれを祝福して言った。「わたし」の友となり、「わたし」の足の下にこの世を置け。「わたし」の望みの通り行えば、何も不自由なことはない。そしてそうになった。「わたし」はこれらすべてのことを見て良しと思った。これが世の終わりの前日のことであった。

すべては暗闇で覆われた。

しかし、神の霊がかすかに水の面（おもて）を動いていた。

ヨハネによる福音書3：16～21

神は、その独り子をお与え担ったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が独りも滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇のほうを好んだ。それが、もう裁きになっている。悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」

憐れみたまえ 主よ

歌の間に、ロウソクを全部ともす

祈り

もしあなたが、
神の子として生きていないならば、
「父よ」といわないでください。

もしあなたが、
自分のエゴイズムの中に、閉じこもっているとすれば、
「私たちの」といわないでください。

もしあなたが、
この地上のことばかり考えているとするなら、
「天におられる」といわないでください。

もしあなたが、
自分の栄光や、自分の名誉のことしか考えないならば、
「あなたの名が尊ばれますように」と、いわないでください。

もしあなたが、
物質的な成功を考えているとすれば、
「み国がきますように」といわないでください。

もしあなたが、
気に入ったことばかり受け入れているとすれば、
「み心が行われますように」といわないでください。

もしあなたが、
貧しい人びとのパンのために働かないなら、
「私たちの今日の糧をお与えください」といわないでください。

もしあなたが、
兄弟姉妹に対する憎しみを味わっているとすれば、
「私たちの罪をお赦してください」といわないでください。

もしあなたが、
誘惑を体験するように身を置くとすれば、
「私たちを試みないように」といわないでください。

もしあなたが、
善のためにコミットしないなら
「私たちを悪から守ってください」といわないでください。

もしあなたが、
主の祈りのことばを、真剣に受け取っていないなら、
決して「アーメン」といわないでください。

「アフリカの 主のいのり」より

暴力の克服に関する資料

† *He Came Singing Peace: Songs to Overcome Violence* (彼は平和を歌いに来られた: 暴力を克服するための歌集)

編集・発行: the New Zealand Hymnbook Trust (ニュージーランド賛美歌トラスト)

2002年4月。英語。

ご注文は: jsmse@paradise.net.nz、または電話: +46 644 902 8855 へ。

† *Overcoming Violence: Teachers' Manuals for Nursery/Kindergarten 3-6,*

Middle Elementary 9-10, Older Elementary 10-12 (暴力を克服する: 保育園児・幼稚園児・小学校中高学年のための教師用手引き)

発行: フィリピン教会協議会、2002年。英語。

ご注文は: nccp@phil.gn.apc.org、または電話: +63 2 928 8636 へ。

† *Learning Peace* (平和を学ぶ)

発行: スイス・エキュメニカル平和プログラム、2001年。ドイツ語・フランス語。

ご注文は: rgeiser@access.ch、または電話: +41 62 844 3907 へ。

† *Youth Peace Training Manual* (青年のための平和訓練マニュアル)

発行: 全アフリカ教会協議会、1999年。英語。

ご注文は: infodesk@aacc-ceta.org、または電話: +254 2 444 1338 へ。

† *Overcoming Violence: The Challenges to the Churches in All Places* (暴力を克服する: すべての地にある教会にとっての課題)

著者: マーゴット・ケスマン (Margot Kässmann) 改訂第2版、2000年。英語およびドイツ語。

ご注文は: publications@wcc-coe.org、または電話: +41 22 791 6111 へ。

WCCのウェブサイトにあるDOVのページ: <http://www.overcomingviolence.org>

ここには、世界中の団体が暴力を克服するためにしていることに関する体験談や写真があります。他の地域的・全国的・国際的な平和運動のDOVに関するウェブページのリンクが増えつつあります。DOVに関する催し物の暦もあります。

発行：日本キリスト教協議会（NCC）
〒169 0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18-24
TEL 03 - 3203 - 0372
FAX 03 - 3204 - 9495
E-mail : ncc-j@jca.apc.org
ホームページ : <http://www.jca.apc.org/ncc-j/>

○この小冊子はWCC発行「Why Violence? Why Not Peace?」を基にして日本キリスト教協議会（NCC）のスタッフにより作成されたものです。○原文の翻訳にあたっては、行本尚史さんの協力を得ました。○WCCの小冊子をご希望の方は日本キリスト教協議会までお申し出ください。